

高校生の情報管理方略と精神的自立

Relation between high school students' information management strategies and psychological independence.

高橋 彩*

Aya TAKAHASHI

Keywords : Social domain theory, Information management, psychological independence, solicitation, Parent-adolescent relationships
社会的領域理論, 情報管理方略, 精神的自立, 親の情報の求め, 親-青年関係

1. 問題と目的

青年期は、自分自身で意思決定し行動する自律性を獲得していく時期である (Steinberg, 1999)。青年が日常の様々な事柄に関して、親の規則や統制を認めなくなり、自分自身で決めても良いと考えようになるにつれて、青年の自由裁量権を認める範囲について親との間で葛藤が生じる (Smetana, 1989 ; Smetana, 2000)。こうした葛藤は主に青年期の初期から中期にかけて起こるが、親自身も青年期の子どもの成長に合わせて規則を変化させ、行動的自律性を認める範囲を拡大してゆき、子どもが大学生になれば親の統制やモニタリングを減少させる (Jensen, Arnett, Feldman, & Cauffman, 2004)。親の養育行動であるモニタリングは、子どもがどこで何をしているのか、誰と友達であるのかといった子どもの行動を監視し、把握することを指す。親のモニタリングの欠如は、一般的に青年のリスク行動と関連することから多くの研究がなされてきた。親のモニタリングは、親が自分の子どもに関してもつ知識の量で測定されてきたが、その知識は主に子どもの自発的な開示によって得られていることが指摘されたのを機に (Kerr & Stattin 2000; Kerr, Stattin, & Trost 1999; Stattin & Kerr, 2000), 青年が自分自身に関する情報を親に対して開示するのか、秘密にするのかといった情報管理方略が注目されるようになってきた。情報管理方略は、「全て話す」(開示) や「嘘をつく」(秘密) の他に、「その事柄について話す事を避ける」、「親が知りたがる重要な部分を省いて

話す」、「親が尋ねたときだけ話す」などがあり、青年は自分に関する情報の種類によって方略を変化させることが分かっている。本研究では、青年の自分に関する情報の種類を、社会的領域理論 (Smetana, 2006; Turiel, 2006) により分類した先行研究に基づき、領域によって情報管理方略がどのように異なるのかを明らかにする。また情報管理方略と親の情報の求め (parental solicitation) との関連や、情報管理方略が親-青年関係、特に青年の精神的自立の在り方によって異なるかどうかを検討する。

社会的領域理論 (social domain theory)

社会的領域理論では、社会的理解や判断、意思決定に用いられる質的に異なる思考を区別する (首藤, 1992; Smetana, 2006; Turiel, 2006)。道徳領域とは、他者の福祉、権利に関連する行為が含まれ、規則とは無関係に善い悪いと判断される思考である。慣習領域は、社会システムの中で個人間の相互作用を調整するように共有された規範やエチケット、マナーに関する問題であると判断する。個人領域とは、個人の統制下にあり、個人に決定権があり、その影響も自分自身のみならず及ぶとする判断である。プライバシーにかかわる問題や個人の好みや選択の問題であると判断される。自己管理領域は、自己の安全や健康にとって悪い影響をもつ行為が含まれる。多面領域は、個人領域と自己管理領域など複数の領域から判断される。情報管理方略の研究で用いられた青年の行動の分類を Table 1 に示した。多面領域の項目は、恋愛関係や夜遅くの外出

*三重短期大学 生活科学科 生活科学専攻 生活福祉・心理コース 准教授

Life and Environmental Science at Tsu City College

など成人であれば個人の自由とみなせるが、個人領域の項目であるお金の使い方や友人の選択に比べると、青年の安全に関わる行動として自己管理領域からも判断されていることが示唆される。

Table 1 先行研究で用いられた項目における社会的領域の分類

	田・平石・渡邊 (2017)	Smetana&Rote (2015)	Nucci et al., (2014)	Yau et al., (2009)
慣習	親に口答えをする 乱暴な言葉を使う 悪口を言う	マリファナ 違法薬物の使用	タバコを吸う マリファナ 違法薬物の使用	タバコを吸う マリファナ 違法薬物の使用
自己管理	健康に良くない食品 を食べる	無謀な運転	授業や学校をさぼる	授業や学校をさぼる
	長時間パソコンを使う 朝ご飯を食べない	門限を過ぎている外出 友人と酒を飲む 酒の出るパーティへ行く	授業中にケータイで ゲームをする 酒を飲む 酒の出るパーティへ行く	酒の出るパーティへ行く
多面	友だちの家に泊まる	親が好まないあるいは 知らない友人と出かける	親が認めていない友人 と出かける	親が認めていない友人 と出かける
	遅くまで外出している 自分の部屋を掃除し ない	恋人とどれぐらい親 密になるか 自由時間をどう過 すか	夜遅くまで外出して いる 親が家にいないとき に友だちの家で過 す	夜遅くまで外出して いる 宿題を終わらせた、課 題を提出したかどうか
	(多面的友情) デートに行く ピアスの穴をあける	誰とどこでデートす るか	デートをすること 恋人がいること R指定の映画を観る	デートをすること 恋人がいるかどうか インスタントメッセ ージに何を書くか
個人	こづかいを自由に使 う 自分の好きなような 服やヘアスタイルを 選ぶ 週末に遅くまで起き ている 家族と一緒に外出す ることよりも友だち に会う	こづかいをどう使う か 誰に夢中になるか	こづかいをどう使う か 友人と出かける服装	こづかいをどう使う か 自由時間をどう過 すか
		友だちと電話で何を 話すか どんなウェブサイト を見るか	携帯で友だちと何を 話すか どんなウェブサイト を見るか	電話で友達と何を話す か スポーツや学校のクラ ブに参加する
		どの友達と一緒に過 ごすか ショッピングセン ターへ行く	どの友達と一緒に過 ごすか 日記に何を書くか	

親への情報開示に関連する要因

青年の親への開示と関連する要因として、親の権威の正当性 (Smetana, Villalobos, Tasopoulos-Chan, Gettman, & Campione-Barr, 2009)、親への開示の義務 (Smetana, Metzge, Gettman, & Campione-Barr, 2006)、親の権威のある養育 (Darling, Cumsille, Caldwell, & Dowdy, 2006) など、親の養育に対する青年の認知が検討されてきた。また、親との親密さ (Yau, Tasopoulos-Chan, & Smetana, 2009)、親への信頼感 (Smetana et al., 2006; Tasopoulos-Chan, Smetana, & Yau, 2009; Smetana et al., 2009; 高橋, 2012)、親との相互作用 (Rote, Smetana, Campione-Barr, Villalobos, & Tasopoulos-Chan, 2012) といった親子関係の質との関連も多く検討されてきた。

親の権威の正当性とは、親が青年の行動に関する規則を作っても良いとする判断のことであり、領域によってその判断が異なることが示されてきた。初期、中期青年は、宿題やテストなど学業に関すること (自己管理領域) は、デート (多面領域) や自由時間の過ごし方 (個人領域) よりも親の権威の正当性があるとし、逆に個人領域の事柄は親の権威の正当性がないと判断した (Smetana et al., 2006)。タバコ、お酒、ドラッグ (自己管理領域) については、青年は他の領域に比

べて親の権威の正当性を認めていた (Cumsille, Darling, Flaherty, & Martinez, 2006)。初期青年期に急激に、青年は個人領域の事柄に対して、親の権威の正当性や親の規則に従う義務を認めなくなるけれども (Darling, Cumsille, & Martinez, 2008)、この判断には個人差がある。例えば、実際に親が作った規則がある場合や (Cumsille, Darling, Flaherty, & Martinez, 2009)、親が支持的である場合は (Darling et al., 2008)、青年は親の権威の正当性を認めていた。一方、問題行動のある青年は、個人領域、多面領域、自己管理領域の全ての領域で、親の権威の正当性を認めなかった (Cumsille et al., 2009)。親の権威の正当性を認めれば、青年が親へ開示するとは必ずしも言えず、親の権威の正当性を認める自己管理領域よりも、親の権威の正当性を認めない個人領域の行動の方が、青年は親へ多く開示していた (Smetana et al., 2009)。

情報の種類 (領域) による親への情報管理方略の違い

中期青年を対象とした研究で、個人領域は親にすべて話すという方略が多く、嘘をつくことは少ないこと (Smetana et al., 2009)、青年は自分の友人関係については、個人領域よりも秘密にすること (Smetana et al., 2006) や、話し合いを避けること (Smetana et al., 2009) が多いことが明らかになっている。日本人高校生を対象とした研究では、全体として青年は嘘をつくことは少なく、「親が尋ねればほとんど話す」と「話し合うのを避ける」という方略が多いことや、自己管理領域よりも個人領域の方が開示することなど、同様の結果が示されている (Nucci, Smetana, Araki, Nakae, & Comer, 2014)。

「親が尋ねた時だけ話す」方略は、問題行動や親への信頼と有意な関連はなく (Tasopoulos-Chan et al., 2009)、青年自身もこの方略が最も許容されるとみなしていたことから (Rote & Smetana, 2014)、青年が普段からよく使用する問題の少ない方略であると言える。一方で、嘘をつくことは、青年の問題行動と関連があった (Marshall, Tilton-Weaver, & Bosdet, 2005)。

親の情報の求めと青年の情報開示との関連

「親が尋ねた時だけ話す」方略が一般的な方略であるならば、青年期の子どもの関する親の知識が主に青年の自発的開示からもたらされるとしても、親のモニタリングは青年の情報開示に効果があると言える。Villalobos Solis, Smetana, Comer (2015) は、アメリカの高校生を対象に、母親が子どもの行動を知ろうとしたり、尋ねたりする程度と、青年が開示、または秘密にする程度との関連を調べた。その結果、悪い行動 (危険なことや、親が承認しないようなことをしたこと)、多面的項目 (夜遅くに外出、遅く帰宅する、恋人と過ごすこと)、個人的項目 (自由時間の過ごし方、友人と何を話すか、誰かに夢中になっていること、誰

と過ごすか)の3つのタイプの事柄すべてで、親が尋ねる程度と、青年の開示する程度との間に有意な中程度の正の相関があった ($r=.40 \sim .47, p<.01$)。また、中国の高校生を対象にした研究 (Hawk, 2017) においても、スイスの9年生を対象とした研究 (Baudat, Van Petegem, Antonietti, J.-P., & Zimmermann, 2020) でも、親の情報の求めは、青年の情報開示に関連するという同様の結果が得られている。

これらの結果から、親が尋ねることは青年の開示を促進することが示唆されるが、青年が親の情報の求めをどう受け取るかによってその効果は異なると考えられる。親が子どものことを知ろうとする行動に対して、青年がプライバシーの侵害と感じたり、非難される可能性を感じれば、開示しない可能性があるからである。

親の行動に対する青年の認知として、親の知る権利を取り上げた研究がある。Rote & Smetana(2016)は、高校生を対象に、自分に関する様々な情報について、親に知る権利があると思うかどうかという認知と、親への情報開示との関連を検討した。その結果、親の知る権利を認める程度は、自己管理領域(酒、たばこなど)が最も大きく、ついで多面領域(夜遅い帰宅、どんなWebサイトを見ているかなど)や個人領域(自由時間の過ごし方、お金の使い方など)が大きく、恋愛行動(デートをするかどうか、恋人と親密になる程度など)については最も小さかった。また、青年が親の知る権利を認めていると、6か月後に情報を隠すことが少なくなることが明らかになったが、恋愛行動だけはそうした予測が成り立たなかった。親の権威の正当性に関する先行研究と同様に、親と青年の評価に差があり、青年に比べ、親の方が自分自身の知る権利を大きく見積もっていた。こうした親子間の認識のずれにより、青年が「親には知る権利がない」と思うことに対して、親が情報を聞き出そうとすれば、青年はプライバシーの侵害と感じ、開示しなくなることが予測される。

親の情報の求めが嘘に関連する例として、青年の親の養育態度の認知を検討した研究がある。父親と母親の養育態度に対して、自律性-支持的と評価する青年では、親の情報の求めは嘘の少なさと関連するが、自律性-支持的ではないと評価する場合は、嘘の多さと関連することが見出されている (Baudat et al., 2020)。ここでの自律性-支持的養育 (autonomy-supportive parenting) とは、ある程度の制限のもとで、親が子どもに行動を選択させる、親が子どもに何か要求するときには、その理由を述べる、青年が親に賛成できない時には、親が子どもの意見をきく、といった特徴である。自律性-支持的養育の反対が、統制的養育 (controlling parenting) であり、親が子どもを従わせるためにおどしや罰を用いたり、子どもに罪悪感をも

たせたり、良い成績をとるような圧力をかけたりする特徴である。母-青年間の意見の不一致の話し合い場面において、考えを明確にしたり、自信をもって意見を述べたり、説明をしたりする青年の方が、個人領域と多面領域(仲間)の事柄についてすべて親に話すという情報管理方略を取ること、個人領域で嘘をつくことが少ないことが示されている (Rote et al., 2012)。意見の違う親に対しても青年が自分の考えを自信をもって説明できるようになることは、自律性-支持的養育によって可能となるだろうが、統制的養育では難しいだろう。統制的養育を行う親から自分の行動をたずねられた青年は、親との意見の不一致から自分の行動が制限されることを予想すると、それを避けるために親を説得するよりも嘘をつく方略を取るかもしれない。高校生と大学生を比較した研究では、親が厳格なルールを設定し、そのルールからの逸脱をほとんど認めないことで高度な統制を発揮することは、大学生では嘘と正の相関があったが、高校生ではそうした関連はなかったことが示されている (Jensen et al., 2004)。この統制的養育と嘘との関連が高校生に見られなかったことは一見矛盾するようにみえるが、おそらく一般的に自律性を獲得し、親のモニタリングも減少する大学生の時期にもかかわらず親の過剰な統制が維持されていることが問題なのだろう。親の情報の求めと青年の情報管理方略との関連は、青年が親の管理や保護から離れ、親とは独立した個人として自分自身で意思決定していく過程において変化すると考えられる。青年が年齢とともに個人の自由と判断する範囲を拡大し、親と不一致がある場合は、自分の判断を優先し、自由に行動するために親に情報を秘密にするといった方略が取られることが示唆されてきたが、青年の情報管理方略と親からの精神的自立との関連を直接扱った研究は、日本において、ほぼみられない。

本研究の目的と仮説

以上の議論をふまえ、本研究では親の情報の求めと情報管理方略との関連を、情報の種類(領域)と親子関係、特に親からの精神的自立の観点から検討する。親の情報の求めは、実際の親の行動と、そうした親の行動に対する青年の感情として不快感も測定する。青年は開示しない理由として、親からの自律性を得るため、プライベートなことだから、誰も傷つけないことだからといった個人領域からの判断を挙げる(例えば、Darling et al., 2006; Smetana et al., 2009; Yau et al., 2009) から、先行研究の領域をそのまま利用するのではなく、青年の「個人の自由」判断を用いて、社会的領域の分類を行うこととした。

まず、親の情報の求めは、母親が青年について知りたがる情報として、お酒など有害で違法な行為や危険行為、学校の成績や宿題が挙げられていたため (Smetana & Rote, 2015)、自己管理領域において多

いと予測した。自己管理領域は親の知る権利を認め、規則を作っても良いと判断していることから、親に尋ねられても嫌だとは感じないと予測した。しかし、自己管理領域の行動は親が心配する内容が含まれるため、親に聞かれれば答えるが自分からは開示しないと予測した。

多面領域にあたる友人関係や恋愛関係などは、個人領域よりも秘密にし、話し合いを避けること (Smetana et al., 2009) から、個人領域よりも自分から開示するとか聞かれたらありのまま話すという方略は少ないと予測した。また、こうした情報を親が尋ねることを嫌だと感じると予想される。

個人領域の情報は、自己管理領域に比べて母親自身が知りたいと評定していなかった (Smetana & Rote, 2015) ことから、親の情報の求めは少なく、親がたずねても嫌だとは感じないだろうと予測した。先行研究同様、他の領域よりも自分から開示するか、親にきかれたらありのまま言う方略が多いだろう。

次に、青年が親に対して使用する情報管理方略は、親子関係、すなわち青年の精神的自立の様相によって異なると考えられる。水本・山根 (2011) は、親からの適応的な精神的自立とは、「親との信頼関係を基盤として親から心理的に分離して親とは異なる自己を築くことである」と定義し、「親との信頼関係」と「親からの心理的分離」の2側面からとらえている。2次元の組み合わせから、信頼関係と心理的分離の両方高い「自立型」、信頼関係だけが低い「密着型」、心理的分離だけが低い「母子関係疎型」、両方が低い「依存葛藤型」の4類型の特徴を検討し、信頼関係の高い「自立型」と「密着型」が、「依存葛藤型」よりも自尊感情が高いこと、心理的分離の高い「自立型」と「母子関係疎型」が自分の行動は自分で決めるといった自律性が高いことを示している (水本・山根, 2011)。

親との信頼関係は開示と正の、うそや非開示と負の関連があるとされるが (Smetana, Metzger, Gettman, & Campione-Barr, 2006)、信頼関係が高いが心理的分離が低い「密着型」の場合は、親がたずねたことに対して領域に関わらず開示し、どの領域においても親がたずねることを嫌だとは思わないと予想した。親との信頼関係が高く、心理的分離も高い「自立型」の場合は、開示すべきかどうかを自分自身で判断しようとするため、領域によって使用する方略が異なることが推測される。「母子関係疎型」のように信頼関係が低く心理的分離だけが高ければ、親が情報を求めようとするとき自体を不快に感じ、聞かれても言わないか嘘をつくことが他の類型よりも多いと推測される。

2. 方法

調査時期と分析対象者 2020年10~11月に、質問紙

調査を依頼し、了承の得られた公立高等学校にて、2年生1クラスと3年生7クラスの各学級担任によって授業時間内に調査用紙を配布、回収された。調査は無記名で、回答は任意であること、回答を拒否しても不利益は生じないことを説明し、一人ずつ封筒に入れて回収した。回答に不備のない269名 (男子126名、女子135名、性別無回答8名、平均年齢17.49歳、SD .64歳) を分析対象とした。

調査内容 最初に、父親と母親のどちらか1人を選び回答すること、質問紙の全ての項目に対し、「親」の表現があった場合は、自分の選んだ親に読みかえて回答することを説明した。

(a) **情報管理方略** : 「自分のお金をどう使うか」など、先行研究 (高橋, 2013 など) で使用された道徳、慣習、個人、多面、自己管理の各領域の項目を参考に作成した20項目からなる。「あなたは普段次のようなことについて、親にはどのように話していますか」という教示のもと、「5. 自分から話す/親の前でかくさない」、「4. 聞かれたら、ありのまま言う」、「3. 聞かれたら、少しだけ言う」、「2. 聞かれても言わないか、話をそらす」、「1. 聞かれたら、ごまかしたり嘘をつく」のいずれか一つを選択するよう求めた。ただし、どうしても選べない場合は「6. 分からない」に回答するように求めた。

(b) **個人の自由** : 「次のような行動は高校生である今のあなたにとって、どの程度“個人の自由”であると思いますか」と教示し、「個人の自由とは、あなた自身でそうするかどうかを決めても良い、あなた自身の判断で行うことだと思っている、という意味です」との説明を教示文に加えた。「個人の自由だと思う (5点)」、「どちらかという個人自由だと思う (4点)」、「どちらともいえない (3点)」、「どちらかという個人自由ではないと思う (2点)」、「個人の自由ではないと思う (1点)」の5件法で評定を求めた。情報管理方略と同じ20項目を、表現を一部修正して使用した。

(c) **不快感** : 情報管理方略と同じ20項目の出来事について親が確認したり、話したりする行動に対して、「あなたの親が次のようなことをした場合、あなた自身はどの程度“嫌だ”と感じますか」と教示し、「嫌だ (5点)」、「どちらかという嫌だ (4点)」、「どちらともいえない (3点)」、「あまり嫌ではない (2点)」、「嫌ではない (1点)」の5件法で評定を求めた。

(d) **親の情報の求め** : 不快感でたずねた親の行動について、親が実際におこなうかどうかについて、「あてはまる (5点)」、「ややあてはまる (4点)」、「どちらともいえない (3点)」、「あまりあてはまらない (2点)」、「あてはまらない (1点)」の5件法で評定を求めた。

(e) 親子関係：水本・山根（2011）の「母子関係における精神的自立尺度」を用いた。尺度は「母親との信頼関係」（「母親は私の考え方を尊重してくれていると感じる」など 6 項目）と「母親からの心理的分離」（「私には、母親とは異なる独立した考えがあると思う」など 5 項目）から構成されており、「母親」という表記を「親」に変えて使用した。“よくあてはまる（5 点）”から“全くあてはまらない（1 点）”の 5 件法で評定を求めた。水本（2016）の「母親への親密性尺度」も質問紙には含まれていたが、今回の分析には使用しなかった。

統計処理は、SPSS Statistics 26 for Windows を用いた。

3. 結果

1) 社会的認知的領域への分類

20 項目の日常の事柄について、「個人の自由」と評価した得点を用いて、因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行い、解釈可能性から 4 因子を抽出した（Table 2）。第 1 因子は、「宿題や課題を提出しないこと」や「20 歳になる前にお酒を飲むこと」など先行研究で自己管理領域として使用された項目が集まったことから「自己管理領域」と命名した。第 2 因子は 6 項目中、「夜遅くまで外出すること」や「ネット上で知り合った人と連絡を取り合うこと」という先行研究で多面領域として使用された項目が 4 項目集まった。さらに先行研究における個人領域（休みの日に、どこに行くのか、何をするのか）と自己管理領域（スマホやパソコンを長時間すること）の項目も含まれた。複数の領域からの判断という意味でも多面領域と解釈し、第 2 因子は「多面領域」と命名した。第 3 因子は進路に関する 2 項目からなるため「進路」と命名し、第 4 因子は恋愛に関する 3 項目からなるため「恋愛」と命名した。

Table 2 「個人の自由」項目による因子分析結果（最尤法プロマックス回転）

項目	F1	F2	F3	F4	平均値	SD	先行研究の領域
no. 第1因子 自己管理領域 (α=.83)							
14 宿題や課題を提出しないこと	0.878	-0.16	-0.1	0.213	3.34	1.49	多面、自己管理学校
16 学校で先生に注意されるようなことをすること	0.684	0.192	-0.086	-0.153	3.01	1.46	
6 学校の授業をさぼること	0.678	-0.005	0.125	0.027	3.34	1.34	自己管理
3 勉強をしなかった結果、試験で悪い点を取る	0.551	-0.11	0.136	0.107	4.30	0.95	親の期待
9 20歳になる前にお酒を飲むこと	0.544	0.309	-0.014	-0.213	2.32	1.49	自己管理
19 健康に良くないようなインスタント食品やお菓子ばかりを食べていること	0.406	0.206	0.021	0.071	4.27	0.96	自己管理
第2因子 多面領域 (α=.76)							
11 夜遅くまで外出すること	0.087	0.749	-0.007	-0.175	3.76	1.18	多面
12 ネット上で知り合った人と連絡を取り合うこと	0.004	0.651	0.043	0.018	4.02	1.07	多面
17 誰と一緒に泊まりに行ったり、旅行に行ったりするか	-0.148	0.589	0.063	0.354	4.60	0.79	多面、多面仲間
10 休みの日に、どこに行くのか、何をするのか	-0.035	0.447	0.254	0.051	4.81	0.55	個人
13 スマホやパソコンを長時間すること	0.174	0.413	-0.01	0.187	4.46	0.79	自己管理
20 ツイッターやインスタなどのSNSに、どんな情報をのせるか	0.198	0.401	-0.015	-0.027	3.69	1.38	多面
第3因子 進路 (α=.82)							
5 卒業後にどんな進路を選ぶか	-0.007	0.086	0.815	0.022	4.93	0.29	
2 将来どんな職業につくか	0.038	0.051	0.761	0.036	4.78	0.56	
第4因子 恋愛 (α=.59)							
18 誰とデートに行くか	-0.002	0.23	-0.192	0.749	4.82	0.48	多面、多面仲間
8 今、恋人をつくること	0.073	-0.147	0.174	0.442	4.84	0.50	多面、多面仲間
4 恋愛対象としてどんな人を好きになるか	0.051	-0.093	0.252	0.411	4.93	0.29	個人
因子間相関							
F1	F1	F2	F3	F4			
F2	0.546						
F3	0.169	0.377					
F4	0.228	0.417	0.384				
除外項目							
1 自分のお金を何につかったか					4.58	0.70	個人
7 親があまり好まないような子と友だちであること					4.64	0.68	多面、多面仲間、個人
15 ダイエットのために食事を抜いたこと					4.27	1.00	自己管理

内的整合性を示す Cronbach の α 係数は、第 1 因子 $\alpha=.83$ 、第 2 因子 $\alpha=.76$ 、第 3 因子 $\alpha=.82$ 、第 4 因子 $\alpha=.59$ であった。因子ごとに下位項目得点の平均値を算出したが、第 4 因子だけは十分な信頼性が得られなかったため、その後の分析は行わなかった。

2) 各変数の基本統計量

「個人の自由」得点の因子分析によって分類した 3 つの領域の下位項目の内容に対応して、「親の情報の求め」と「不快感」も領域ごとに項目得点を合計し、項目数で除して下位尺度得点を算出した（Table 3）。領域によって「親の情報の求め」得点に差があるかを一元配置の分散分析（被験者内要因）で検討したところ、1%水準で有意であり（ $F(1.6,432.1)=483.6, p<.01$ ）、多重比較（Bonferroni）の結果、点数の高い順に進路、多面領域、自己管理領域となった。「不快感」についても同様に検討したところ、1%水準で有意であり（ $F(1.5,419.5)=77.3, p<.01$ ）、点数の高い順に多面領域、自己管理領域、進路となった。

母子関係における精神的自立尺度は、下位尺度である「親との信頼関係」（ $\alpha=.87$ ）と「親からの心理的分離」（ $\alpha=.77$ ）のそれぞれの平均を算出した（Table 3）。「親との信頼関係」と「親からの心理的分離」は 1%水準で有意な負の相関があった（ $r=-.46$ ）。

Table 3 下位尺度の平均値 (SD)

	領域	平均	SD	度数
個人の自由	自己管理	3.43	0.95	268
	多面	4.22	0.68	268
	進路	4.77	0.53	269
親の情報の求め	自己管理	1.89	0.83	268
	多面	2.78	0.78	268
	進路	3.88	1.15	268
不快感	自己管理	2.33	0.93	268
	多面	2.48	1.02	267
	進路	1.82	1.00	269
親との信頼関係		3.98	0.82	269
親からの心理的分離		3.33	0.85	269

3) 親への情報管理方略の領域差

領域ごとに情報管理方略の選択数を示した (Table 4)。領域により方略の選択数に偏りがみられた ($\chi^2(10) = 145.96, p < .01$)。「聞かれたら、ごまかしたり嘘をつく (以下, うそ)」は他の領域よりも, 自己管理領域に多かった。「聞かれても言わないか, 話をそらす (以下, 話をそらす)」は自己管理領域で多く, 進路で少なかった。「聞かれたら, 少しだけ言う (以下, 少し言う)」は多面領域で多く, 進路で少なかった。「聞かれたら, ありのまま言う (以下, ありのまま言う)」は自己管理領域で多く, 多面領域で少なかった。「自分から話す/親の前でかくさない (以下, 自分から話す)」は進路で多く, 自己管理領域で少なかった。

Table 4 領域別の親への情報管理方略 (選択数)

	情報管理方略					
	うそ	そらす	少し言う	ありのまま	自分から	不明
自己管理	80	123	271	613	416	63
多面	36	98	331	540	498	63
進路	6	4	64	200	244	4

注) 自分から: 自分から話す/親の前でかくさない, ありのまま: 聞かれたら, ありのまま言う, 少し言う: 聞かれたら, 少しだけ言う, そらす: 聞かれても言わないか, 話をそらす, うそ: 聞かれたら, ごまかしたり嘘をつく, 不明: 分からない

4) 情報管理方略と親の情報の求めおよび不快感, 親子関係との関連

情報管理方略と「親の情報の求め」や「不快感」との関連を検討するため, 領域ごとの下位尺度得点で相関係数を算出した。情報管理方略は, 1項目につき5つの方略のうち1つを選択する回答方式だったため, 各方略を選択したら1, 未選択は0とし, 領域の下位項目を合計して項目数で除したものを, 各領域の方略得点として用いた。

Table 5に示したように, 「親の情報の求め」は, 進路の「自分から話す」との間に1%水準で有意な正の相関 ($r = .30$)があったが, 他の領域や方略とはほぼ関連がなかった。また, 「親の情報の求め」は, 自己管理

と多面領域では方略以外の変数である「不快感」, 「親との信頼関係」, 「親からの心理的分離」, のいずれとも関連がなかった。しかし, 進路では「親の情報の求め」は, 「不快感」($r = -.32$)と「親からの心理的分離」($r = -.21$)とは1%水準で有意な負の相関があり, 「親との信頼関係」($r = .20$)とは1%水準で有意な正の相関があった。

「不快感」は, すべての領域で, 「うそ」と「話をそらす」と「少し言う」との間に1%水準で有意な正の相関があった (Table 5)。「不快感」と「少し言う」との相関は, 自己管理領域では有意であっても数値が低く ($r = .19$) 関連がほぼないと言えるが, 多面領域 ($r = .41$)と進路 ($r = .54$)では中程度以上の相関があった。

一方, すべての領域で「不快感」と「自分から話す」との間に1%水準で有意な負の相関があり, 相関係数は自己管理領域 ($r = -.24$)よりも多面領域 ($r = -.50$)や進路 ($r = -.51$)で大きかった。また, すべての領域で, 「不快感」は, 「親との信頼関係」との間に中程度の有意な負の相関 ($r = -.40 \sim r = -.47$)があった。

5) 青年の精神的自立の4類型による親の情報の求め, 不快感, および情報管理方略の違い

青年の情報管理方略が, 親-青年関係によってどのように異なるのかを検討するため, 精神的自立尺度の「親との信頼関係」と「親からの心理的分離」の2次元の高低の組み合わせから調査対象者を4つに類型化して比較した。水本・山根 (2011)に従って, 各変数の中央値 (「親との信頼関係」: $Mdn = 4.17$, 「親からの心理的分離」: $Mdn = 3.40$)を基準とし, 両変数とも低い「依存葛藤型」, 信頼が低く分離が高い「関係疎型」, 信頼が高いが分離が低い「密着型」, 両変数とも高い「自立型」に類型化した。

4類型によって, 各領域の「親の情報の求め」と「不快感」の平均値に差があるかどうか検討するため, 一元配置の分散分析を行い, 類型の主効果が有意であった場合, 多重比較 (Bonferroni)を行った (Table 6)。

Table 5 情報管理方略得点と親の情報の求め, および各変数との相関 (N=269)

自己管理領域	うそ	そらす	少し言う	ありのまま	自分から	1. 親の情報の求め	2. 不快感
1. 親の情報の求め	.03	.01	.08	-.06	-.01		
2. 不快感	.28 **	.35 **	.19 **	-.02	-.24 **	-.03	
3. 親との信頼関係	-.22 **	-.39 **	-.16 *	.16 *	.28 **	.02	-.40 **
4. 親からの心理的分離	.15 *	.22 **	.07	-.12 *	-.10	-.09	.18 **
多面領域	うそ	そらす	少し言う	ありのまま	自分から	1. 親の情報の求め	2. 不快感
1. 親の情報の求め	.05	-.03	-.05	-.08	.16 **		
2. 不快感	.25 **	.42 **	.41 **	-.14 *	-.50 **	-.04	
3. 親との信頼関係	-.35 **	-.45 **	-.24 **	.15 *	.37 **	-.01	-.47 **
4. 親からの心理的分離	.21 **	.24 **	.13 *	-.08	-.19 **	-.08	.23 **
進路	うそ	そらす	少し言う	ありのまま	自分から	1. 親の情報の求め	2. 不快感
1. 親の情報の求め	.05	-.09	-.16 **	-.15 *	.30 **		
2. 不快感	.22 **	.22 **	.54 **	.10	-.51 **	-.32 **	
3. 親との信頼関係	-.14 *	-.20 **	-.26 **	-.10	.35 **	.20 **	-.45 **
4. 親からの心理的分離	.13 *	.04	.14 *	.11	-.22 **	-.21 **	.28 **

注) 自分から: 自分から話す/親の前でかくさない, ありのまま: 聞かれたら, ありのまま言う, 少し言う: 聞かれたら, 少しだけ言う, そらす: 聞かれても言わないか, 話をそらす, うそ: 聞かれたら, ごまかしたり嘘をつく

注)** $p < .01$, * $p < .05$

「親の情報の求め」は進路においてのみ、類型の主効果が有意であり($F(3, 264)=6.445, p<.01$), 「関係疎型」が他の類型よりも点が低かった。「不快感」は自己管理($F(3, 264)=8.27, p<.01$), 多面($F(3, 263)=10.95, p<.01$), 進路($F(3, 265)=12.16, p<.01$)のすべての領域で類型の主効果が有意だった。自己管理と多面領域の「不快感」はともに、「密着型」と「自立型」よりも「依存葛藤型」と「関係疎型」の方が点が高かった。進路の「不快感」は「関係疎型」が他の類型よりも点が高かった。

Table 6 精神的自立4類型における個人の自由、親の情報の求め、不快感の平均値

	依存葛藤型 (n=56)		関係疎型 (n=100)		密着型 (n=69)		自立型 (n=44)		F値	多重比較
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
親の情報の求め										
自己管理	1.97	0.79	1.88	0.79	1.92	0.97	1.77	0.78	0.51	
多面	2.85	0.81	2.82	0.78	2.72	0.81	2.69	0.71	0.52	
進路	4.03	0.94	3.50	1.22	4.20	1.01	4.07	1.22	6.45	疎<依, 密, 自
不快感										
自己管理	2.57	0.82	2.55	0.91	1.98	0.90	2.08	0.89	8.28	依, 疎>密, 自
多面	2.68	0.95	2.81	1.04	2.05	0.93	2.14	0.89	10.95	依, 疎>密, 自
進路	1.77	0.72	2.25	1.19	1.51	0.82	1.40	0.72	12.17	疎>依, 密, 自

注) 依: 依存葛藤型, 疎: 関係疎型, 密: 密着型, 自: 自立型

4 類型によって情報管理方略の得点に差があるかどうかを検討するため、一元配置の分散分析を行った。まず、自己管理領域では、「話をそらす」($F(3, 265)=9.17, p<.01$)と「自分から話す」($F(3, 265)=9.43, p<.01$)の方略得点に類型の主効果があり、「話をそらす」は「関係疎型」が「密着型」と「自立型」よりも点が高く、「自分から話す」は「密着型」が「依存葛藤型」と「関係疎型」よりも点が高かった (Figure 1)。

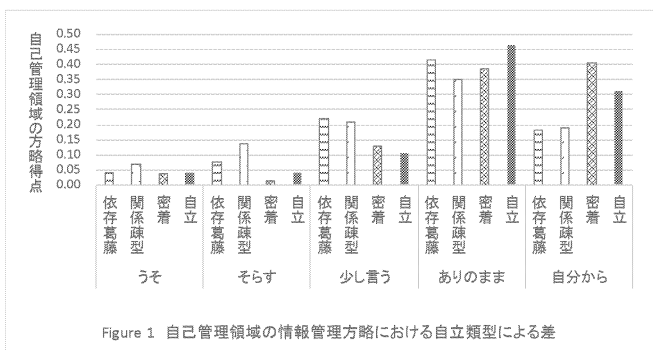


Figure 1 自己管理領域の情報管理方略における自立類型による差

次に、多面領域では、「ありのまま言う」以外の方略は類型の主効果が有意であった (Figure 2)。「うそ」は「依存葛藤型」と「関係疎型」が、「密着型」と「自立型」よりも点が高かった($F(3, 265)=4.63, p<.01$)。「話をそらす」は「関係疎型」が、「密着型」と「自立型」よりも点が高かった($F(3, 265)=6.04, p<.01$)。「少し言う」は「依存葛藤型」と「関係疎型」が、「密着型」よりも点が高かった($F(3, 265)=5.69, p<.01$)。「自分から話す」は「密着型」と「自立型」が、「依存葛藤型」と「関係疎型」よりも点が高かった($F(3, 265)=12.71, p<.01$)。

最後に、進路においては「うそ」と「話をそらす」の方略得点は 0 点の類型が複数あったため類型の主効果は有意ではなかったが、「少し言う」($F(3, 265)=6.27,$

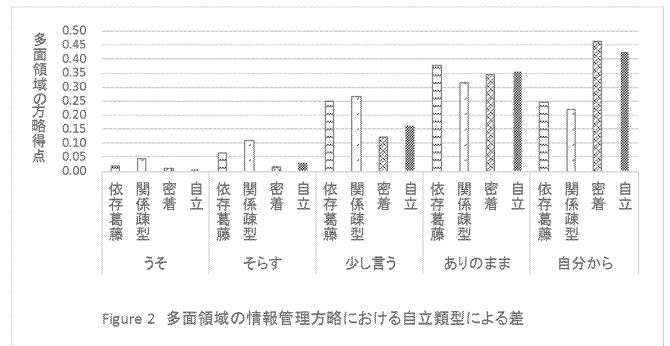


Figure 2 多面領域の情報管理方略における自立類型による差

$p<.01$), 「ありのまま言う」($F(3, 265)=3.59, p<.01$), 「自分から話す」($F(3, 265)=13.38, p<.01$)は類型の主効果が有意であった。「少し言う」は「関係疎型」が、「密着型」と「自立型」よりも点が高かった。「ありのまま言う」は「依存葛藤型」と「関係疎型」が、「密着型」よりも点が高かった。「自分から話す」は「密着型」が「依存葛藤型」と「関係疎型」よりも点が高く、「自立型」が「関係疎型」よりも点が高かった (Figure 3)。

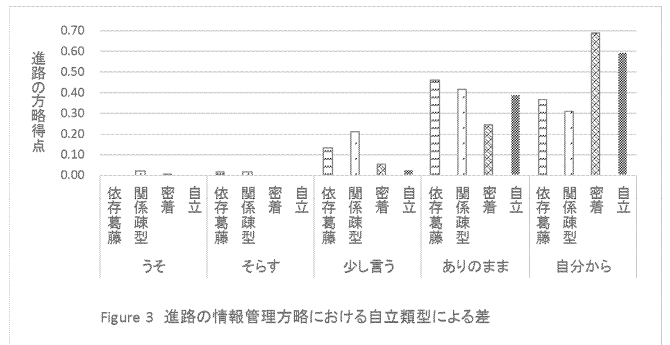


Figure 3 進路の情報管理方略における自立類型による差

4 類型の方略の特徴をまとめると、信頼が低く分離のみ高い「関係疎型」は自己管理領域と多面領域では「話をそらす」方略を、進路では「少し言う」方略を信頼が高い類型よりも多く使用していると言える。一方、信頼が高く分離が低い「密着型」はすべての領域で、信頼が低いタイプよりも「自分から話す」方略を使用していると言える。

4. 考察

本研究は、高校生を対象に、親に対する情報管理方略が、情報の種類(領域)によってどのように異なるかを明らかにし、領域ごとに情報管理方略と親の情報の求め、および親のそうした行動に対する不快感との関連を検討した。さらに、情報管理方略と親子関係との関連を検討するため、親からの精神的自立を4つの類型に分けて、類型によって情報管理方略や親の情報の求めがどのように異なるかを検討した。

まず、高校生が自分に関する様々な事柄を、どのような社会的領域から判断をしているのかを知るために、「個人の自由」得点を用いて因子分析を行った結果、

自己管理領域、多面領域に解釈できる2つの領域と、進路に関する事柄に分けることができた (Table 2)。進路は2項目からなっていたが、平均値から青年は最も個人の自由であると評価していた (Table 3)。先行研究では個人領域の項目の代表として、休日の過ごし方と自分のお金の使い道が使用されてきたが、因子分析の結果、お金の使い道については除外項目となり、休日の過ごし方は多面領域にあたる因子に含まれた。よって個人領域の仮説については先行研究と比較することは難しいが、進路の因子が概念としては個人領域に相当するとみなすことができるだろう。本研究の多面領域の項目は、青年がどこで誰と何をしているのかといった青年の所在と行動に関する内容がまとまっており、親のモニタリングとして測定されてきた内容 (Kerr & Stattin, 2000) にあたると解釈できた。

情報管理方略や親の情報の求めと不快感との関連は、領域によって異なっていた。自己管理領域は、他の領域よりも「聞かれたら、ごまかしたり嘘をつく」が多く、「聞かれても言わないか話をそらす」は進路よりも多く、逆に「自分から話す/親の前でかくさない」は進路よりも少なかった。よって、「自己管理領域の行動は親が心配する内容が含まれるため、親に聞かれれば答えるが自分からは開示しない」という仮説は支持された。しかし予想に反して、親の情報の求めはむしろ少なく、そうした行動と不快感との関連もなかった。自己管理領域の項目の未成年の飲酒や健康に悪い食事、学校の成績や課題などは、母親が知りたがる情報ではあるが (Smetana & Rote, 2015)、学校によく適応している子どもに対しては特に尋ねる必要がない。自己管理領域の親の情報の求めが他の領域よりも多くなかった理由は、調査対象となった高校生の多くが学校や学業の面で特に問題がなかったためと考えられる。

多面領域は、個人領域よりも自分から開示するとか、聞かれたらありのまま話すという方略は少ない」という仮説については、個人領域がなく直接比較できなかったが、「聞かれたらありのまま話す」は、自己管理領域に比べれば少なかった。進路に比べると「聞かれたら少しだけ言う」が多かった。多面領域における親の情報の求めと不快感には関連がなかったものの、親のそうした行動への不快感は、「聞かれても言わないか、話をそらす」、「聞かれたら少しだけ言う」、「ごまかしたり嘘をつく」という方略とは正の、「自分から話す」方略とは負の相関があった。多面領域の友人関係は、個人領域よりも秘密にし、話し合いを避けること

(Smetana, et al., 2006 ; Smetana et al., 2009) が示されているが、本研究の結果は、「聞かれたらありのまま言う」のではなく、「少しだけ言う」方略を選択することで、情報を秘密にしていることが示唆された。

「個人領域は他の領域よりも自分から開示するか、親にきかれたらありのまま言う方略が多いだろう。」と

いう仮説は、個人領域ではないが、進路についてみると、「自分から話す」ことは多面領域よりも多く支持されたが、「聞かれたらありのまま言う」という方略については特に多いとは言えなかった。ただし、進路に関して「聞かれても言わないか、話をそらす」ことは自己管理領域よりも少なく、「聞かれたら少しだけ言う」ことも多面領域よりも少なかったことから、全体的に非開示方略は取らないことが示唆された。おそらく調査対象者が受験を控えた高校3年生が多かったことが影響したと考えられる。親の情報の求めも、他の領域よりも比較的多く、青年は進路について個人の自由であると評価しながらも、親の情報の求めが多いほど、自分からも言うことが多かったことから、自分の進路について親へ積極的に情報を開示していることが示唆された。多面領域と同様に親の情報の求めを嫌だと感じると、「聞かれても言わないか、話をそらす」、「聞かれたら少しだけ言う」、「ごまかしたり嘘をつく」という方略とは正の、「自分から話す」方略とは負の相関があった。

つぎに、精神的自立の4類型の差について、「密着型」の場合は、「親がたずねたことに対して領域に関わらず開示し、どの領域においても親がたずねることを嫌だとは思わない」という仮説はおおむね支持された。「密着型」は「自分から話す」方略がすべての領域で「依存葛藤型」と「関係疎型」という親との信頼関係が低い類型よりも高く、親の情報の求めに対する不快感も自己管理領域と多面領域では「依存葛藤型」と「関係疎型」より低かった。また「依存葛藤型」および「関係疎型」の2つの類型と「密着型」との間の有意差は、多面領域の「聞かれたら、少し言う」や、進路の「聞かれたら、ありのまま言う」においてもみられ、いずれも「密着型」の方略得点が低かった。「聞かれたら、ありのまま言う」という最も一般的で問題がないと考えられている方略 (Tasopoulos-Chan et al., 2009 ; Rote & Smetana, 2014)、が低かった理由は、「密着型」が基本的に自分から開示しているため、「親から聞かれたら」言うことが少ないためだと考えられる。

「密着型」と同様に親との信頼関係は高いが、心理的分離も高い「自立型」についてみてみると、不快感については「密着型」と同じ結果となったが、方略については、少し異なる結果となった。「自立型」は自己管理領域では他の類型と差がなく、多面領域では「密着型」と同様に「自分から話す」方略が「依存葛藤型」と「関係疎型」よりも高く、進路領域では「自分から話す」方略が「関係疎型」よりも高かった。他の方略についてはどの領域においても特に他の類型との間に差がなかった。「自立型」の場合は、「開示すべきかどうかを自分自身で判断しようとするため、領域によって使用する方略が異なる」と予想したが、全体的に自分から開示する「密着型」に対し、自立型は自己管理

領域を他の領域と区別している可能性が示唆された。

「親からの心理的分離」は、青年が親を1人の人間として客観視し、自分と親とはそれぞれ独立した考えや独自の人生を持つ存在としてとらえていることを表す(水本・山根, 2011)。「密着型」は心理的分離が果たせていないため、自分一人で意思決定するよりも、自分のことを理解し、助けてくれる親の考えを確認したいと感じ、自分に関するどんな情報でも自分から開示するのかもしれない。

「親との信頼関係」が低く「親からの心理的分離」が高い「関係疎型」は予想どおり、すべての領域で不快感が他の類型よりも高かった。さらに、「関係疎型」は進路における「親の情報の求め」が他の類型よりも少なかったにもかかわらず、不快感は他の類型よりも高かった。また自己管理領域と多面領域で「話をそらす」が、多面領域と進路において「少し言う」が、「密着型」や「自立型」よりも高かった。個人領域の事柄を親に開示することは、親密さや信頼感やサポートといった良好な親子関係を反映していることが示唆されてきた(Yau et al., 2009; Smetana et al., 2006; Tasopoulos-Chan et al., 2009; Smetana et al., 2009; 高橋, 2012)。「親との信頼関係」が低く「親からの心理的分離」が高い「関係疎型」の高校生は、親と自分の考えが異なり、自分の考えが理解されないと感じるため、進路について親と話し合えない関係である可能性が示唆される。

5. 今後の課題

今回、親の情報の求めがあるほど、青年が開示するとした先行研究(Villalobos et al., 2015)とは異なり、親の情報の求めそのものよりも、その行動に対して嫌だと感じることで青年の情報管理方略の個人差に関連しており、青年が親との信頼関係を感じていないほど、親の情報の求めに対して嫌だと感じていることが明らかになった。親の情報の求めに対して嫌だと感じることや、親との信頼関係が低いことは、うそや話をそらす、少しだけ言うといった非開示方略と関連し、逆に嫌だと感じないことや親との信頼関係が高いことは自分から話すという方略につながるものが明らかになった。

精神的自立の4類型について、「密着型」から心理的に分離して、「自立型」に移行する経路は適応の高い自立のプロセスであるが、親との信頼関係を基盤としないで心理的分離をはたす「依存葛藤型→関係疎型経路」は適応の低い自立のプロセスであることが示唆されている(水本・山根, 2011)。本来、「親からの心理的分離」は、青年期発達において望ましいあり方であるが、今回の結果では独立した次元と考えられている「親との信頼関係」との間に中程度の負の相関があり、「不快感」とも弱い正の相関があった。「親からの心理的分離」

単独では、「自分から話す」ことと負の、「うそ」や「話をそらす」と正の有意な相関がみられた領域もあった。この結果が、高校生の特徴であるかどうかは、さらに青年期後期にあたる大学生との比較による検討が必要だろう。社会的領域の分類で、恋愛関係については内的整合性が低かったため検討することが出来なかったが、恋愛関係については情報開示に関連する要因が他の領域とは異なることが示唆されていることから

(Rote & Smetana, 2016)、今後は項目数を増やすなど検討していきたい。

今回は、社会的領域理論に基づいて、高校生の情報管理方略と、親の情報の求めや親子関係の関連に焦点をあてたために、青年の性別や選択した親との組み合わせは検討しなかった。今後は母親と父親と子どもの性別による親子の組み合わせにより、青年の情報管理方略を検討する必要もあるだろう。

引用文献

- Baudat, S., Van Petegem, S., Antonietti, J.P., & Zimmermann, G. (2020). Parental solicitation and adolescents' information management: The moderating role of autonomy-supportive parenting. *Journal of Child and Family Studies*, 20, 426-441.
- Cumsille, P., Darling, N., Flaherty, B. P., & Martinez, M. L. (2006). Chilean adolescents' beliefs about the legitimacy of parental authority: Individual and age-related differences. *International Journal of Behavioral Development*, 30, 97-106.
- Cumsille, P., Darling, N., Flaherty, B., & Martinez, M. L. (2009). Heterogeneity and change in the patterning of adolescents' perceptions of the legitimacy of parental authority: A latent transition model. *Child Development*, 80, 418-432.
- Darling, N., Cumsille, P., Caldwell, L.L., & Dowdy, B. (2006). Predictors of adolescents' disclosure to parents and perceived parental knowledge: Between- and within-person differences. *Journal of Youth and Adolescence*, 35, 667-678.
- Darling, N., Cumsille, P., & Martinez, M.L. (2008). Individual differences in Adolescents' beliefs about the legitimacy of parental authority and their own obligation to obey: A longitudinal investigation. *Child Development*, 79, 1103-1118.
- Hawk, S. T. (2017). Chinese adolescents' reports of covert parental monitoring: Comparisons with overt monitoring and links with information management. *Journal of Adolescence*, 55, 24-35.
- Jensen, L.A., Arnett, J.J., Feldman, S.S., & Cauffman, E. (2004). The right to do wrong: Lying to parents among adolescents and emerging adults. *Journal of Youth and Adolescence*, 33, 101-112.
- Kerr, M., & Stattin, H. (2000). What parents know, how they know it, and several forms of adolescent adjustment: further support for a reinterpretation of monitoring. *Developmental Psychology*, 36,

- 366-80.
- Kerr, M., Stattin, H., & Trost, K. (1999). To know you is to trust you: parents' trust is rooted in child disclosure of information. *Journal of Adolescence*, 22, 737-752.
- 水本深喜・山根律子(2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係:「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4類型モデル」の検討 教育心理学研究, 559, 462-473.
- Nucci, N., Smetana, J., Araki, N., Nakae, M., & Comer, J. (2014). Japanese adolescents' disclosure and information management with parents. *Child Development*, 85, 901-907.
- Rote, W. M., & Smetana, J. G. (2016). Beliefs about parents' right to know: Domain differences and associations with change in concealment. *Journal of Research on Adolescence*, 26, 334-344.
- Rote, W. M., & Smetana, J. G. (2015). Acceptability of information management strategies: Adolescents' and parents' judgments and links with adjustment and relationships. *Journal of Research on Adolescence*, 25, 490-505.
- Rote, W. M., Smetana, J. G., Campione-Barr, N., Villalobos, M., & Tasopoulos-Chan, M. (2012). Associations between observed mother-adolescent interactions and adolescent information management. *Journal of Research on Adolescence*, 22, 206-214.
- Smetana, J. G. (1989). Adolescents' and parents' reasoning about actual family conflict. *Child Development*, 60, 1052-1067.
- Smetana, J. G. (2000). Middle-class African American adolescents' and parents' conceptions of parental authority and parenting practices: A longitudinal investigation. *Child Development*, 71, 1672-1686.
- Smetana, J. G. (2006). Social-cognitive domain theory: Consistencies and variations in children's moral and social judgments. In M. Killen & J. G. Smetana (Eds.), *Handbook of moral development* (pp. 119-153). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Smetana, J. G., Metzger, A., Gettman, D. C., & Campione-Barr, N. (2006). Disclosure and secrecy in adolescent-parent relationships. *Child Development*, 77, 201-217.
- Smetana, J. G., & Rote, W. M. (2015). What do mothers want to know about teens' activities? Levels, trajectories, and correlates. *Journal of Adolescence*, 38, 5-15.
- Smetana, J. G., Villalobos, M., Tasopoulos-Chan, M., Gettman, D. C., & Campione-Barr, N. (2009). Early and middle adolescents' disclosure to parents about activities in different domains. *Journal of Adolescence*, 32, 693-713.
- Stattin, H., & Kerr, M. (2000). Parental monitoring: a reinterpretation. *Child Development*, 71, 1072-1085.
- Steinberg, L. (Ed.). (1999). *Adolescence* (5th ed.). Boston: McGraw-Hill. pp. 274-299.
- 首藤敏元 (1992). チュリエル 日本道徳性心理学研究会 (編) 道徳性心理学: 道徳教育のための心理学 北大路書房 pp. 133-144.
- 高橋 彩 (2012) 社会的領域理論からみた青年期の自律性: 親の情報の求めと青年の開示による検討 愛知学院大学総合政策研究, 15, 31-45.
- 高橋 彩 (2013) 大学生の親に対する情報管理方略: 社会的認知的領域による検討 愛知学院大学総合政策研究, 16, 11-23.
- Tasopoulos-Chan, M., Smetana, J. G., & Yau, J. P. (2009). How much do I tell thee?: Strategies for managing information to parents among American adolescents from Chinese, Mexican, and European backgrounds. *Journal of Family Psychology*, 23, 364-374.
- 田 玲玲・平石賢二・渡邊賢二 (2017). 中学生の母子関係における親権威の概念の不一致と母子間葛藤, 子どもの心理的適応との関連 発達心理学研究, 28, 24-34.
- Turiel, E. (2006). The development of morality. In N. Eisenberg (Ed.), *Handbook of child psychology, Volume 3: Social, emotional, and personality development* (pp. 789-857). New York: Wiley.
- Villalobos, S. M., Smetana, J. G., & Comer, J. (2015). Associations among solicitation, relationship quality, and adolescents' disclosure and secrecy with mothers and best friends. *Journal of Adolescence*, 43, 193-205.
- Yau, J. P., Tasopoulos-Chan, M., & Smetana, J. G. (2009). Disclosure to parents about everyday activities among American adolescents from Mexican, Chinese, and European backgrounds. *Child Development*, 80, 1481-1498.

謝辞

本研究の質問紙調査実施にご協力いただきました高等学校の先生方, 生徒の皆様にご心から御礼申し上げます。